

「24時間仕事、24時間遊ぶ」が 知識と知識をつなぎ、ひらめきを生む

株式会社 シード

SEED
消すものづくり。
SINCE 1915



株式会社 シード

代表取締役社長：玉井 繁
創業：1915年(大正4年)
従業員数：80名
事業内容：消しゴム、修正具の製造販売

今月は、大阪市都島区の「株式会社シード」取材させていただきました。同社はロングヒット商品のプラスチック消しゴム「Rader」をはじめとする様々な字消し文具を中心に製造し、昨年創業100周年を迎えました。世界で初めて修正テープを開発するなど、常に新しい商品を発売し続けています。今回は修正テープの開発者である代表取締役社長の玉井繁氏から、同社の歴史や商品の開発についてお話を伺いました。

飛躍のきっかけとなった プラスチック消しゴムの発売

当社は大正4年9月に「三木康作ゴム製造所」として創業し、昨年100周年を迎えました。創業当時はゴム産業が発達したところで、主に工業用のゴム製品（ホース、ゴム手袋など）を取り扱っており、海外から輸入した天然の生ゴムで製品をつくっていました。現在の主力製品の消しゴムは、数ある製品の一つという位置づけでした。

その後順調に成長していましたが、戦後生ゴムの輸入に規制がかかり、少ない材料で生産できる製品へシフトする必要があります。そこで、戦後のベビーブームを見込み、学童用の消しゴムに目をつけました。この頃、社名も変更し一新してスタートすることになりました。昭和25年、当社の製品のブランド名として認知されていた「シード」から「シードゴム工業」に社名を変更し、本格的に文具業界に参入していきました。

ターニングポイントとなったのは昭和31年のプラスチック消しゴムの生産です。それまでは天然ゴムを原料として使用していましたが、時間がたつと硬くなり、消しゴムとしての機能が失われるという欠点がありました。

一方、プラスチック消しゴムは塩化ビニルを素材とし、従来の消しゴム

とは異なり、経時変化による劣化がありません。さらに素材が純白で無臭なので、色や香りを自由につけることができます。そして昭和43年、試行錯誤を繰り返し、「レーダー（Rader）」が誕生しました。



消しゴムの定番となった「レーダー」

発売直後は大きな反響はありませんでしたが、昭和45年に雑誌「暮らしの手帖」で、安くて一番よく消えると紹介されました。当時、暮らしの手帖は公平な目で見ているという点から信頼性が高く、権威を持っていました。記事の掲載後、レーダーは全国に広まり生産量は大幅に増えました。

修正テープの開発 商品化は世界初

レーダーのヒットの傍ら、時代を見据えた新しい柱をつくらなければという思いがありました。そこで、当時流行していた修正液を売り出しました。しかし、すでに他社からたくさん発売されており、ほとんど売れず全部

消しゴムの新しい使い方の提案

壁の汚れ落とし用の消しゴムや、修正テープの仕組みを応用した汚れ隠しのテープなど、文具店に限らず売り出せる生活雑貨に商品領域を広げ始めている。



様々なアレンジが楽しめる「けしごもスタンプ」。初心者を楽しめるよう彫刻刀がセットになっている商品や、デザイナーとのコラボ商品も多数。



消しゴムで培った技術を応用し、壁の汚れ消しゴムや水アカの汚れ、サビ落としなどの製品も開発している。



修正テープの技術を応用したテープタイプの壁紙補修材。手軽に壁にできた画紙やネジの穴を隠す以外にも、壁のシミや落書き、破れなどにも使用できる。

社員で使うという苦い経験をしました。この経験から、修正液を超えるものをつくりたいと思いました。修正液の欠点・不満は「乾くのが遅い」「表面がでこぼこになる」というのが主なものでした。この欠点を克服すべくカセットテープの構造から表面がフラットなものを貼ればいいのかと目をつけました。さらに、やるなら「理屈ではなくカッコいいものをつくりたい」というこだわりがありました。

修正テープの開発は紙を貼るところから始めました。しかし、紙が薄すぎれば字が透けてしまい、厚すぎればコピーを取った際影になってしまいます。そこで、消しゴムに文字を転写する技術を使って転写式のものをつくれなかと考えました。

テープのフィルムと紙の接着力に対してバランスを取るのが非常に難しく、絶妙なバランスを見つけるために3～4年試作を繰り返しました。



世界初の修正テープの試作品

そして、平成元年に世界初の修正テープ「ケシワード」が誕生しました。しかし、手動でテープを巻き取る仕組みになっているなど、使いづらさがありました。そこで翌年発売した第2号の「ケシワードII」ではその点を改良し、テープを自動で巻き取り、横書きに合わせて横引きで使えるようにしました。使いやすくなったことで一気に広がりました。おかげさまで、修正テープは他社からも発売され、全世界に普及しました。今では、年間日本で3000万個以上、世界では1億個ほど生産されています。開発者としては修正テープが文具として定着し、今も残っているのはうれしいことです。

ふとしたひらめきが おもしろい商品を生む

日本の文房具はととも種類が多く、その中で新製品をつくるというのはなかなか大変です。同じ土俵で勝負してもなかなか目立ちませんので、新しいものを常に出していくことをいつも目指しています。開発の人には「24時間仕事で24時間遊び」という気持ちを持ってほしいと言っています。会社で座っているからといってアイデアが浮かぶというものでもありません。会社を出たら何も考えないのではなく、遊びに行っても、家にいても、常に頭の

どこかで気にかけていると、ふとアイデアを思いついたりします。

また、ひらめきとは、どれだけたくさんものを見たか、知っているかだと思えます。知識がたくさんあっても、何かと何かが結びつかないと新しいものは出てきません。知っているもの同士を新しい方向性で結びつけることで、まったく新しいものが出来ることがあります。そういう意味では好奇心旺盛なことが大事です。好き嫌いや何でもいろいろ知っていて損はありません。知っていたら何かの時にうまく結びつき、おもしろい製品ができるかもしれないから。

消しゴムにこだわり 新しい用途を提案

今後、少子高齢化に加え筆記具離れもありますので、字を消すだけの消しゴムをつくり続けているだけでは売上を維持していくのは大変です。ただ、あくまで当社は消しゴム屋なので、消しゴムから離れてしまうと経営基盤を見失うような気がします。

これからの時代、消しゴムのあり方は変化していくと思います。常に先を見据えて展開し、これまで培った技術を活かして他の製品にも水平展開することが大事だと考えています。